

劇団 風の子 中部

ユエと 瑠璃色の石

作 せきゆみ
演出 河野真理子
音楽 曲尾友克
美術 小峯三奈
振付 熊谷佳代
衣裳 田島千穂
制作 西川典之





果たしてユエはヤン王子から
「瑠璃色の石」を守るのか。
ユエの瞳は何を見つめ、
どこへ歩んでいくのか。

制作にあたって

コロナ禍の中で、人はどう生きるかを問われている。新しい生活様式の名のもと「3密」を避けて生きる人間社会が出現した。「当たり前」という価値観の中で考えることをやめる大人たちがつくる社会。子どもたちは「あそび」を奪われ、自分の意思を表現する機会を奪われてしまったかのようだ。それでも子どもたちは、したたかに自分を表現し、成長しようというエネルギーを持った存在だ。

今、私たちは、子どもたちにどんなメッセージを届けることが出来るのだろうか。人間が成長するために本来あるべき環境において、そこに子どもたちを据えたら、子どもたちはどんな生き方を選択するのだろうか。現代社会ではない、ファンタジーの世界、空想の世界に子どもたちをいざない、子どもたちの想像力を最大限に解き放ちたいと思った。

お城の中で自由を満喫できずにいる一人の少女がいた。名前はユエ。物語は始まる。小国の姫は突然現れた侵略者と対峙し、初めて城の外の世界へと向かう運命に。今まで当たり前を守られてきた籠の中から、すべてを自らの手で掴んでいかなければ生きていけない世界へと。

今を生きる、自分を生きる。彼女が感じた世界が彼女の世界を変えていく。

人はみな幸せになりたいと思って生まれてくる。今を生きる子どもたちにも、まわりに合わせることが目的ではなく、私の幸せ、本当にやりたいことって何だろうと自分自身に問い続ける事を大事にして欲しい。彼女に託す我々の願いを、彼女自身がどう切り拓いていくのかを、私たちの織り成す世界で表現してみようと思う。

西川 典之

ユエの物語が生まれるまで

コロナ禍以前から自分の子育てを通じ、子どもをとりまく環境を危惧してきました。危険がないようにと必要以上に過敏な大人の視線に晒されたり、テクノロジーが進化する一方で五感を使ったリアルな体験が失われていたり。果たして子どもたちは健やかに成長していけるのだろうか。そんな問いから、少女ユエの物語は生まれました。

ユエは、お城で大切にされるあまり外の世界に触れることも許されない日々を送っていました。そこへ大国の王子が「瑠璃の石」を求め侵略してきますが、ユエはただただ途方にくれるだけです。ユエが自らの意思で立ち上がっていくには、どうしたらいいのか。何が必要なのか。そこから私とユエの旅は始まりました。

そして出会ったのが、ハオたち谷の人たちです。彼らのモデルは、かつての地球で暮らしてきた人々で自分たちの命は自然の一部であることを知っている人たちです。子どもたちは集団の中で育てられ、小さな子どもの意思も尊重されます。その姿勢に、私たちが学ぶことがたくさんあるように思うのです。

ユエも谷の人たちと出会い、多くのことを学び、徐々に秘めていた感情を出せるようになります。そして、「瑠璃の石」を求めて谷に乗り込んできた王子の横暴に、ユエはハオと共に立ち向かっていこうとします。ユエは自らの意思で動こうとしていくのです。

舞台の最後に、歌がでてきます。「わたしは あるいていく わたしの光を めざして」子どもたち一人一人、胸の中に宿る光がきっとある。その光を目指し、歩いていく力が、きっとある。ユエの物語を通して、この歌が子どもたちへの応援歌になりますように。そう願いをこめて、この物語を紡ぎました。

作 せき ゆみ

STORY

昔々、山間の小さな国の

小さな城に、ユエという女の子が
おりました。

ユエは石の塔から出ることは許されず、小さな
窓からいつも月を眺めておりました。

そんなある日、大国の王子ヤンが、永遠の命を宿す
「瑠璃色の石」を求め、ユエの国に侵略してきます。

逃げ出したユエがたどり着いた先は緑深い谷でした。
少年ハオや様々な生き物に出会い、ユエは少しずつ

抑えていた気持ちを表現できるようになる……

月に向かって歌いだすユエ。その歌によって

「瑠璃色の石」が谷にあることを知ったユエ。

そこへヤン王子が石を狙って谷へとやってきて……



●ユエがいろんな人とあって、ぼうけんしているのが、ぼくもぼうけんしたいな～とおもって、もういっかいみたい～とおもいました。さいごのタペストリーがきれいでした。かんどうしました。(1年)

●わたしは、あんな町があればいいなと思いました。私が、ユエになりたかったです。すごくおもしろいのでまたみたいです。(2年)

●ユエとハオの歌がきれいでした。ユエがるり色の石を守ろうとしているところが、すごかつたわってきました。どんなかんじかを顔で表してすごかったです。鳥をつかまえて食べる時に、ユエが「かわいそう」と言っていたけど、じい「命をもらっている」と言っていたので、私たちもいろんな物などに命をもらっているんだなと思いました。(3年)

●わたしが今日のげきで心にのこったところは、ユエが一人ですり色の石を見つけた所です。あまり外に出たことがないユエが、森に道を教えてもらっている所は、ドキドキしました。山の中をさんさくすることがあって、わたしはしぜんを大切にしようと思っていたので、ユエと同じ気持ちになれて少し泣きそうになりました。また、げきを見せてほしいです。(3年)

●ぼくは、「ユエと瑠璃色の石」をみて、ユエが、谷に落ちて、そこから少しづつたすけられながら、歩んでいくのがいいと思いました。この時代だからこそ、伝えられることではないでしょうか。これからも楽しい作品をよろしくお願いします。(4年)

●おひめさまのユエがハオやハオのおじいさんと出会い今までのユエより命の大切さなどをたくさん知れたんじゃないかなと思う。またヤン王子も今回の事で命の大切さを少しは知ってくれたかな？と思いました。たった4人だったのにお城の風景や森の景色のようすがすごく伝わってきたし、たくさんの登場人物の個性をたった4人でえんじていてすごいと思った。とても楽しかったです。本当にありがとうございました。(5年)

●私は、ユエがるり色の石を手にもって、最後に歌をうたっているときが一番心に残っています。一人が何人もの人をえんじていることにびっくりしました。最後に森が緑や青にかがやいているのがとっても感動しました。ハーモニーがすごくきれいで、私もそんなふうにハーモニーを友達といっしょにやってみたいです。すごかつたのしい時間でした。ありがとうございました。(5年)

●はじめは、おくびょうで弱弱しかったユエが、いろんな初めての出来事で成長していく姿が、かっこいいなと思いました。ねずみのチャチャや、谷の民少年ハオと出会い「瑠璃色の石」を探していくのがおもしろかったです。実際、今世界では、地球温暖化が進んでいます。自然や生き物が死んでいく姿を見ているので、さらに自然を大切にしていこうと思いました。ユエとハオとチャチャのように自分にできることをしっかりと、この世界を守っていこうと強く思いました。ちなみに、ユエはなぜチャチャとしゃべれたのですか、いまだになぞです。(6年)

●今回の劇で、伝えてくださったことは、自分がたとえどんなに弱くて、何もすることが出来なかったとしても、きっといつかは自分だってきれいな瑠璃色に明るく輝くことが出来て、自分から変わって、強くなれるということだと思います。ですのでぼくも、人前に出ることが苦手で、どう動いてみんなをまとめたら良いのかと不安になってしまうけど、ぼくもこの物語を通して強くなっていきたいです。(6年)

●久しぶりの観劇会にわくわくしました。(子どもにもどります)。白い舞台装置に、音楽(楽器と歌声)が色をつけ、話が進むにつれて、いろんないろんな景色が見えて来ました。いつの間にか低学年が劇に引き込まれて、思わずつぶやいていました。(いつも思います。すごいなあ)。3年生は、理科でモンシロチョウを育てたことがあるので、あの瑠璃色の石は、さなぎだったのかも・・・と想像をしました。「木の涙」とか「るり色」とかいう言葉の響きも神秘的で子どもたちの興味をそそりました。何もできなかった王女様は、何もさせてもらえなかったから、できなかっただけなんだよね。いろんなことに自分で挑戦していく子どもたちになって欲しいな。メッセージをありがとうございました。(小学校、教員)

●ユエの母親がこっそり瑠璃の石の歌を教えていたというエピソードが深いですね。親視点で、子どもに何を託すべきなのか？を考えさせられました。ユエが最初から最後まで純粋無垢なところ、ネズミとのやり取りが好きでした。ほっこりしました。自分だけでなく、周りの人の幸せも願えるようなおとなになって欲しいものです。(45歳)

●自然との共生、人間のエゴイズム(自然に対する)を考えさせられた。人でも植物でも動物でも、物質的な体(形)がなくなっても、この地球に生き続けていくことを、感覚としてうけとれる作品だと思う。心のやわらかい、低学年以下の子もたちと一緒に観たい。舞台の作り方が芸術的ですばらしかった！白を基調としたセットが、瑠璃の石をよくうつし出していたと思う。(61歳)

